



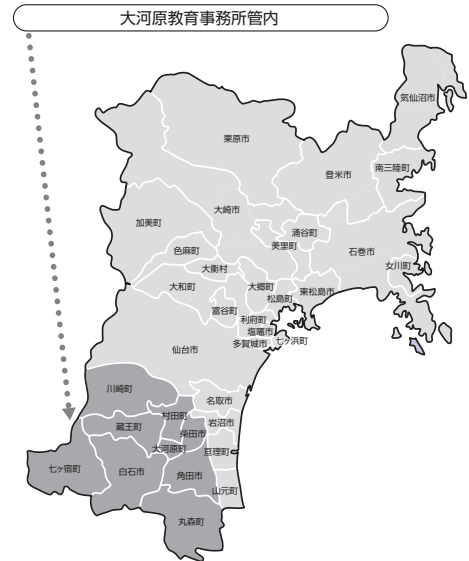
## 大河原教育事務所管内

大河原教育事務所管内では、防災安全教育に関することが最も多く挙げられていた。「避難に対応するための備え」「学校としての備蓄の必要性」「災害時の非常用持出物品の準備」など物品への備えが必要であると感じた養護教諭が特に多かった。同時に、「保健室の備品類、薬品類、防災用品などの整理整頓と備え」「保健室の毛布やタオル類を多めに準備」など保健室における救急物品の備えが必要と感じた養護教諭も多く、常日頃から災害への備えが大切と感じた。「あらゆる災害を想定し、事前の準備や訓練が必要」と避難訓練・防災教育の重要性を記述していたり、「学校を支えてくれたのは、地域の方々だった。学校は地域のものであり、教育活動と地域との関わりは深いと改めて感じた」と地域との関わりを記述していた養護教諭もいた。

次に、東日本大震災に関わることとして、福島に近い地域のため「原発により、今後も不安が大きい。今後の対応を指導いただきたい」「どのように子供を放射線から守っていったらよいか悩む」「原発事故の対応に苦慮」と放射能に関わることを挙げていた養護教諭がいた。「校舎内では子供は元気に笑顔で生活しているが、保護者や教職員のストレスが大きいと感じる」「震災が、違う国で起こっていることのように話す生徒が多くみられた」「2つの学校での二重生活や他の学校を借りていて自由にできないというストレスが溜まり、些細なことでクラス内でのめごとが頻繁におき、落ち着きのない生活が続いていた」「内陸部の被害の少ない状況でも、毎月11日には、震災の時の話が子供たちからでることもある」など様々な子供の状況が記述されていた。

さらに健康相談として挙げられたのが、「自分の辛さを表現することができず、苦しい思いをしている子供や保護者がたくさんいる」「家庭内では一人になりたがらない、親元を離れられない等の色々な形で心に傷を負っている」など心と体の両面へのアプローチの必要な子供たちがいることや「震災及び被災者に関する指導は継続していく必要がある」と長期の心のケアが必要なこと、「被災地からの転入生の中には、精神的に安定するまで時間を要し、体調不良のため保健室で休養」「被災地からの転校生の心が不安定となり不登校」など被災地からの転入生に関わる事が挙げられていた。

職務全体としての振り返りには、「自分の力量不足を感じた」「これで良かったのか何かすべきことはなかったのかと自問自答している」など災害時のかかわりに不安になっている養護教諭がいた。また、「転勤先で子供たちの変化に気づきにくい。日常の様子を知る人間であればこそ、小さな変化に気づいてあげられたのではないか」「被災地に新任養護教諭が赴任し、対応が大変だった。どうにか複数配置にして欲しい」「被災転入生が多く、複数配置（加配）を強くお願いしたい」という意見もあった。



■記述から

- 本校は県内では放射線量が高い地区に位置している。保護者にとっての「安全」と「安心」は別物であったことを学んだ。原発事故の対応は非常にデリケートで苦慮した。
- 女子が甘えたがったり、ささいなことで不安になったりしたことは、震災の影響だったのかと、勉強不足だと感じる。
- 被災当時は気仙沼の山の手の方の学校で被害は少なかったが、物資の調達や子ども（帰れない、家のない）を健康に過ごさせることに配慮が必要だった。日頃の子どもの健康、既往状態などの把握がこのときに役立ち、薬の確保、体調変化を早めに発見することができた。
- 大変な出来事であったが、少しでも早く通常通りの生活、特に学校生活が送れるよう努めることがいかに大切かということを実感した。子どもたちにとって学校とは、“いつも”を取り戻す大切な空間であると感じた。
- 放射線という目に見えない恐怖があり子どもたちよりも保護者への不安を和らげるにはどうすればよいか、どうすることが養護教諭として必要なのか、ということを考えさせられました。また、震災直後、暗いマイナスの雰囲気の中で、そのことをプラスに考える保護者の声（食べ物が限られていたので、野菜嫌いの子も野菜を食べました。節水・節電を意識するようになりました・・・など）から、プラス思考の考え、前向きな気持ちを養護教諭として伝えたり話をする大切さを感じました。
- 震災を理由に不登校になる場合もあると思いますが、その生徒がより長い時間を家族と過ごしたいと思っているなら、それを優先すべきだと思いました。本校でも1名休みがちになった生徒がおりましたが、現在は笑顔を取り戻し、登校できるようになりました。日にち薬ということがどんなに大切かを感じました。
- 専門職としての知識を求められること（あたりまえですが・・・）、避難所になったため、老若男女問わず、いろいろな質問や要望が多かった。それは「保健の先生」の枠を越えて「病院」並みの扱いだったと思う。
- 心のケアの重要性です。1学期、本校にも被災地から1名生徒が転校してきました。学校が始まり、数日は登校できましたが、心が不安定となり（以前の友人と離れてしまった、新しい環境になじめない等）不登校になってしまいました。主に学年の先生方が関わっていましたが、養護教諭はほとんど関わることができなかつたように思います。私も知識不足があり、また、周囲の先生方とも対応の仕方について話し合うべきだったと思いました。養護教諭としての関わりをもう一度よく考えていくべきだと反省しました。



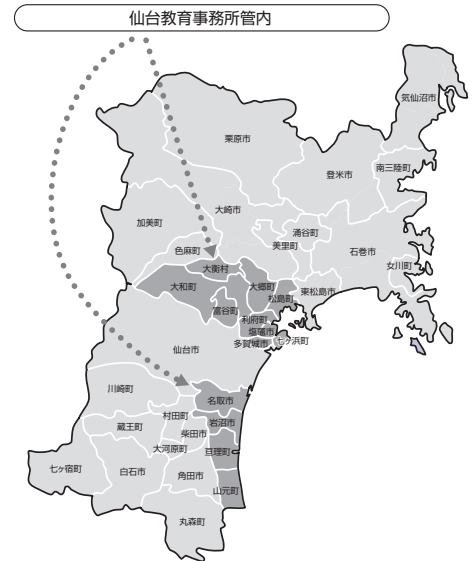
## 仙台教育事務所管内

仙台教育事務所管内では、職務全般への振り返りについての記述が最も多く、「ベテラン養護教諭のもとシフトを組んで救護活動にあたった」「反省もあるが自分ができることを精一杯やった」「沿岸部のような被災をしたら迅速な対応・判断ができたか」といった、養護教諭としての立場や役割、支援についての思いが強いことがわかる。また、学校職員としての養護教諭の思いが、職務全般の「教職員同士の和が大切」「職員の協力があってこそできた」などの記述になっていると思われる。

次に、災害への備え、特に「物品の備えの必要性」「体制整備の必要性」についての声が多く挙がった。備蓄品の必要性は、備蓄倉庫の備品チェック、学校への食糧備蓄など、避難所となった場合すぐに使うと思われる物品整備の他、施設設備などのハード面の整備、緊急連絡システムの整備など多岐にわたっている。体制整備は、自治体本部との関わり方や役割分担を明確にしてほしいなど、学校が避難所になるならば、そのことを考えた体制をつくってほしいという記述が多かった。

また子供だけでなく、教職員にも体と心の両面へのアプローチが必要な実態があった。特に、居住地が大きな被害を受け「自分も被災しダメージを受けているにもかかわらず激務を続けなければならない」教職員の実態もあった。

仙台教育事務所管内は、内陸部の地震被災地域と沿岸部の津波被災地域が混在していることから特徴的な記述はないが、全般にわたり広く記述されていた。



### ■記述から

- 災害時に養護教諭としてすぐに対応できるマニュアルがあるといい（記録も含めて）。
- 避難所でなくても学校というだけで一般の方々も必ず避難して来ると想定し、最低限の物（毛布、水など）を備蓄しておく必要性を感じた。
- 震災後、学校が始まった当初は「子どもの心のケアをして、しっかり支援していかなければ…」と思っていたが、すぐには心の状態に現れないことがわかった。むしろ、子どもの身近にいる大人（家族・教師）の心が安定して、子ども達に接することで、子ども自身が安心して生活できるということを感じた。
- 全てが未経験の中で判断したり、計画して実行しなければならず、心身の疲労を感じることもできないほどのハードな日々だった。
- 誰も応援に来ない時、養護教諭として、トリアージ・カテゴリー、緊急時の医療の知識が必要。
- 避難所に泊まり込んで世話をした。自分の家族のことを心配しながらも「養護教諭として何とかできることをやりたい」と思ったのは使命感からでしょうか。
- いつか起こると言われていたものの、いざ起きてみて改めて考えさせられることが多かった。保健室では地震発生時の備品を十分に準備すべきだと思いました。
- 幸い生徒にも学校にも大きな被害はなかったが、そのような地域に自分がいたら、何をしていたのだろうか、どうしていただろうと考えると恐怖を感じる。とっさの判断が自分にはできるだろうか。
- 避難者の中には高齢者もいて「養護教諭」とは名乗れず『応急手当ができる者』としました。児童生徒には通用する養護教諭という立場が、社会的にはどのように受け止められているか不安を感じた場面もありました。
- 外部からの様々な支援団体、そしてマスコミについては、何を目的としているのかよく調査した上で、子どもたちの心身の負担を考えて対応していかなければいけないと思った。
- 心のケアが大事と考えすぎて、疾病の発見が遅くなってしまった事例がありました。身体症状＝ストレスと思い対応して、スクールカウンセラーとも協力したのですが違っていました。もっと違った視点からも観察すべきでした
- 今回の震災で経験したことを、養護教諭みんなで共有することが大切だと思う。

## 北部教育事務所管内

健康相談における児童生徒への対応に関する記述が最も多くあった。「不調を訴える児童が多い」「精神的なショックはかなり受けているなどの記述があり、心身両面への支援を必要としている児童生徒がいる」と認識している養護教諭が複数いた。そして、「心身の健康を長期的に見守る」「子どもたちの様子をアンテナを高くして、広く観察することが必要」といった意見があった。

また、被災地からの転入生への対応に関しては、「話す内容、資料にかなりの配慮が必要」「児童の変化をしっかりとらえていく」など、養護教諭が細心の注意を払って対応していた様子が見える。

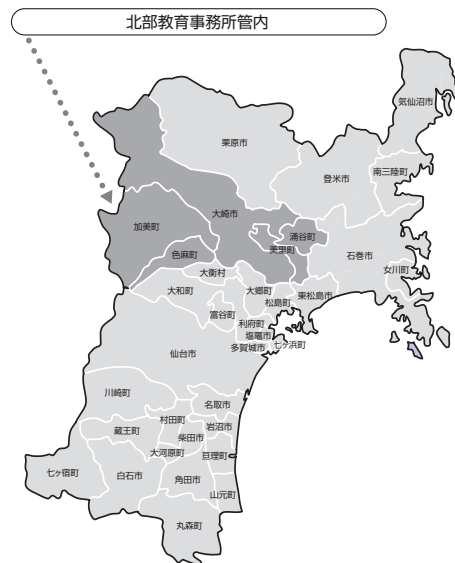
今後の災害への備えに関する記述も多く、「保健室にも薬品以外の準備が必要」「普段から飲料水、毛布などを用意」などの提案もみられた。体制の整備については、「教職員全員で、緊急時の対応を再確認する必要」「学校が避難所になった際の対応の整備」など、複数の記述があった。

また、放射能関連では、「放射能による健康被害についても継続的にとらえる必要」「健康調査・保健調査の重要性」などの記述があった。

そのほか、震災を振り返り、「自分が平常心を取り戻し、パワーを蓄えて向きあうことができなかった」「避難所運営では、養護教諭として何かできることがあったのではないかと後悔」など、養護教諭として十分に役割が果たせなかったという記述もあった。

### ■記述から

- 体育館が地域の避難所になっていたのですが、火傷や擦過傷の手当等はしましたが、どのようにどこまで手を出して良いのか、マニュアルがなく困ったが、できることを精一杯やりました。万が一のため、避難所には備蓄庫が必要と痛切に感じました。
- 震災を通して価値観が大きく変わったとよく言われるが、養護教諭としての子どもへの思いは変わらないと考える。子ども一人ひとりいろいろな形で震災の影響をうけているので、それを受け止める保健室としては、養護教諭一人では不十分。本校の場合、東京都より派遣していただいたことは、とてもよかった。
- 日ごろから緊急時のけがを想定して救急用品を用意していたため、今回の地震の際は大変役に立った。また、救急用品は養護教諭だけでなく教職員の誰でもが持ち運べるように保健室内での保管場所を明確にし、周知してもらうことも大切だと実感した。
- 原発事故による放射能被害は、この後もずっと続きます。こちらは養教として取り組むべき課題だと考えています。
- 放射能問題に関しては、今あるおかしいなどと思うこと、目の前にある現実の積み重ねが疫学調査になる。私達自身に自覚が必要だ。不安や怖さを口にする親や子どもが異端の目で見られるのは養護教諭が率先して声をあげないからではないだろうか。目指す先が健康安全・安心であらなければならないと思う。
- 子どもらの生命を守らなければと、命の尊さを実感した。今後、安全管理の見直しや、放射線（能）問題にも対応しなければと思う。いとしい子どもらの心に寄り添い、見守っていきたくと、養教としての自覚を新たにした。不適応反応を起こした本人はもとより、家族を支えることが重要で、早期の対応の必要性を実感した。





## 北部栗原教育事務所管内

北部栗原教育事務所管内では、岩手・宮城内陸地震（災害発生日時：平成20年6月14日 8時43分）を体験した地域のため、「応急処置用の止血帯や薬を準備しておいた」など救急用品の備えがあったことや「地区の養護教諭部会で対応をまとめたことが役に立った」など、災害への備えがあった学校の記述が複数みられた。また、今回の震災では避難所になった学校が少なかったことから、「避難所を運営する場合はどのようにしたらよいか」などの不安の記述がみられ、今後さらに検討していかなければならない課題と思われる。

災害への備えについては、物品の備えの必要性についての記述が多くみられたが、その内容には、「備蓄倉庫の場所は1階がよい」「教職員が物品の保管場所を知っておくことが大切」などの記述があった。

その他、「防災無線・ラジオは聞き流さない」「救急カバンをすぐに持ち出せた」「地震の日は落ち着いた行動をとって感心した」などの記述からも分かるように、岩手・宮城内陸地震を体験した地域ならではの意見や感想が多かった。今まで対策してきたことや準備してきたことが今回の震災時に活かされていた結果と思われる。しかし、避難訓練・防災教育についての記述の中には、「今までの訓練を個に活かす訓練をしていきたい」「防災教育の充実の必要性を感じた」など、改めて見直す必要があることが挙げられていた。

また、他の地区と比べ、児童生徒の心のケアに関する記述が2件と少なく、教職員の心のケアに関しての記述はみられなかった。対策してきたことや準備してきたことに加え、被害が比較的少なく、家族が無事であったことなどが理由と考えられる。しかし、1件ではあるが、岩手・宮城内陸地震を体験したことから、今回の震災後に「フラッシュバックを起こして、女子生徒が泣き出し過呼吸を起こした」という記述があった。今後、児童生徒の長期的な健康観察が必要なことを示唆しており、心のケアを行う際に押さえておきたい貴重な情報であった。

### ■記述から

- ・内陸地震を経験していたので、地震そのものに対する恐怖、不安のために大きく児童の様子に影響したことは多くなかったと思います。家族で過ごす時間が多かったことや、生活するために努力しあっている姿を見て感じるものがあつたからではないかと思う。
- ・訓練では注意されていましたが、地震の日は落ちついた行動をとって感心した。子どもたち全員を自宅に帰り安全確認に2時間かかりました。みな無事で安心できたが、環境が違っていたら心が乱れます。また、起こるのではと不安になることがあります。
- ・断水や停電。放射能の汚染など、たくさんの不便はありましたが、校舎への被災もなく、生徒達も全員無事でした。養護教諭としての立場で、特記することはありません。全職員一丸となって行動できたことが良かったことです。沿岸地域の方々や被災にあわれた方々、避難所で活動なさった先生方には、本当に感謝と申しわけない気持ちでいっぱいです。
- ・2008年の岩手・宮城内陸地震を経験していたので、保健室には応急処置用の止血帯や薬を備蓄しておくようにしました。本校にきても、多くは備蓄できませんが、準備してあります。今後、保健室にどのような物を準備したらよいか考えていきたいと思っています。
- ・避難所とはならなかったがもしそうなったらどんな物を準備しておく必要があるだろうか、対応は？・・・校内の職員とも話題にしているところです。
- ・3年前の地震の被害が甚大だったため、フラッシュバックを起こして、女子生徒が泣き出し過呼吸をおこした。内陸の方は、今回震度7であった。それほど大きな被害には見舞われなかったが、余震が長く続いたためか、その後も過呼吸を起こす生徒が見られた。継続して健康観察する必要性を感じた。
- ・誰かの指示を待つのではなく、自ら判断し行動できる力を身につけさせたい。

北部栗原教育事務所管内



## 東部登米教育事務所管内

東部登米教育事務所管内では、健康相談に関する記述が最も多く「地震が起こると不安そうな顔をする子供」に対して「心的外傷に対するケアの難しさ」を感じながら児童生徒に対応していた様子がうかがえる。また「沿岸部からの転入生が悩んでいる」「家を失くして転入してきた子供の心のケアを続けたい」などがあり、被災地からの転入生に関する記述が目立った。多くの学校に転入生が入り、もともと在籍している児童生徒との違いに、養護教諭として特別な配慮をしていたことが推察できる。しかし一方では、「多忙な時期で優しい声をかけられなかった」「情報交換（引き継ぎ）が行えなかった」などの記述があり、対応に困難を感じていたことも分かった。

次に災害への備えに関する記述が多く、中でも「備蓄の準備が必要である」「現状では不足していて不安である」など、物品の備えに関する意見が最も多かった。また、「非常用持ち出し品にレベル1・2…をつけておくとよい」などの具体的な提案もみられた。体制の整備についての記述も複数あり、「医療との連携した備え」や「地域との連携が必要」といった意見がみられた。

執務全体を振り返った記述では、「異動先の子供たちに十分なケアができず申し訳ない」「心のケアのために残りたい気持ち」「養護教諭は被災校で勤務すべき」「異動先で何ができるか不安」といったものがあることから、年度替わりで異動したために辛さや不安を感じながら日々の執務にあたっていた養護教諭が多いことが分かった。

東部登米教育事務所管内の小中学校では避難所となった学校は15.2%と少ないが、「災害時の保健室についての機能や役割の確認・検討が必要」という記述があり、「被災地の方々の経験を聞き研修したい」など他地区から間接的な学びを得て、災害時の保健室を想定しての検討が必要であると感じている養護教諭が多い。今すぐに行えることとして「保健室の備品の点検」や「物が落ちにくいような工夫を日頃から行うことが大切」という記述もみられた。





## ■記述から

- 震災を経験したことにより、子どもたちの命を守るという使命を強くした。
- 災害時における保健室の機能、養護教諭としてどう対応していくべきか、今後、被災地の方々の体験された事をお聞きしながら研修を深めていきたい。
- 今後、またいつどこでも起こりうることを考えると、災害時における保健室の機能や役割について確認しておくことも重要であると感じています。多くのことを経験なされた先生方より、学ばせていただきたいと思います。
- 学校のみならず、地域や医療とも連携した防災の意識や備え等、日頃から考えておくことが大切だと感じています。
- 震災で大変な中の異動はとてとてもきつく、辛いものでした。子どもたちの心のケアのために残りたい気持ちでいっぱいでした。異動先の子どもたちにも十分なケアをすることができない申し訳なさも大きかったです。
- トイレの衛生面は課題かと思います。仮設トイレが届かずプールから水をくみ流したり、年配者用にポータブルトイレを室内に置きました。プールにくみ取り式トイレもあったので使用しましたが、やはり敬遠しがちでした。つまり、におい、また感染性胃腸炎等対処が必要でした。
- 被災地からの転校生が数名いました。それぞれいろいろなことを抱えているので、声をかけるのに悩んでしまった時がありました。情報交換ができなかったという大変さがありました。
- 自宅が被災していなくても、親戚が亡くなったり、祖父母の実家が流されたり何らかの形で震災の影響を受けている生徒が多い。志津川からの転入生も10数名おり、表面上は新しい環境に慣れてきているように見えるが、保護者からの相談で、悩みが知らされたケースもある。スクールカウンセラーとの連携を深めて、長期間にわたって心のケアに努めなければいけないと思う。教職員の中にも被災した先生が勤務しているので、生徒はもちろんの事、職員の健康管理にも気配りが必要であると思う。
- 学校が避難所となった場合、保健室の備品（タオル、布団、毛布など）や衛生用品を提供することになるので、日頃から点検しておくことが大切だと思った。



七夕飾り制作7 くす玉完成